百足屋殺し

野村胡堂

一

「親分、お早ようございます。――お玉ガ池の辺に、妙な泥棒がはやるそうですね」

ガラッ八の八五郎は、朝の挨拶といっしょに、こうニュースを持って来るのが、長いあいだの習慣でした。銭形平次に取っては、まことに結構な順風耳ですが、その代りモノになるのはほんの十に一つで、あとは大抵愚にもつかぬ、市井の噂話に過ぎなかったのです。

「妙な泥棒は苦手だよ。この間もうちの三毛猫を盗んだ野郎を縛って拷問にかけて、猫の子をどこへやったか白状さしてくれと、気違いのようになって飛込んで来たお神さんがあったが、あんなのは困るよ」

少しばかり青葉が覗く縁側の障子を開けて、畳に腹ん這になったまま、黄表紙を読んでいた平次は、起き上がると煙草盆を引寄せて、これぱかりはよく磨いた真鍮の煙管とともに八五郎の方に押しやるのです。

「今日は良い煙草がありますよ、この通り手刻みなんかじゃありません。毛のように細かくて山吹色だ」

ガラッ八はそう言いながら、懐中から半紙に包んだ一と握りの煙草を取出して、指先でちょいと摘んで見せながら、平次の方へ押出します。

「なるほどこいつは良い葉だ。国分か、水戸かな、――何処でくす

©2018 萩 柚月

ねて来たんだ」

「人聞きの悪いことを言っちゃいけません。お玉ガ池の変な泥棒のことを調べに行って、百足屋市之助の店に坐り込んだとき貰って来ましたよ」

「なるほど、お玉ガ池には百足屋という大きな煙草問屋があったな、――だが、その術をチョクチョク用いちゃならねえ。煙草屋だから宜いが、同じ山吹色でも、両替屋などの店先に坐り込んで、小判というものを半紙に包んで出されたら、どうするつもりだ」

「大丈夫ですよ、そんな気障なものは振り向いても見やしません」

「ところで変な泥棒というのは何んだ」

平次は思い直して話を本筋に引戻しました。

「お玉ガ池から小泉町へかけて、今月に入ってから五六軒泥棒に入られましたよ」

「盗られたのは？」

「それが不思議なんで、大きい家を狙って、雨戸を外して入り、泥足で家中荒し廻るのに、大した物を盗るわけでもなく、精いっぱいのところで、薬鑵を持出したり、洗濯物の包をさらったり、子供の玩具を盗んだり、――それも盗みっきりにするわけではなく、少し離れたところへ捨てて行くから変じゃありませんか」

「泥棒の姿を見た者はないのか」

「二人三人あるようですが、恐ろしく素早い泥棒で、捉まえるどころか、人相も見定めた者もありません。何んでも、五尺七八寸もあるだろうと思うような、肩幅の広い大男だったそうで――」

「それだけじゃ悪戯としか思えないな。しばらく様子を見るほかはあるまい」

「物騒で叶わないから、何んとかしてくれと、町役人がうるさく言ってますが」

「手の付けようはないじゃないか。盗んだ品を皆んな捨てて行く泥棒じゃ、――だが、そいつは何んか企らみのあることだろうよ、――薬鑵も玩具も捨石に違いないような気がするが――」

平次は何やら考え込んでしまいました。八五郎はその顔を眺めながら、プカリプカリといわゆる山吹色の国分の煙を輪に吹いております。

この変な小泥棒事件が、思わぬ発展を遂げて、世にも奇怪な結果になろうとは、さすがの平次も気が付かなかったのです。

それから四五日経って、一と雨降った後のよく晴れた朝のことでした。

「親分、お玉ガ池の泥棒は、とうとう大変なことをやりましたよ」

ガラッ八の八五郎は、例の髷節を先に立てて飛んで来たのです。
「何んだ、いよいよ猫の子でも盗んだというのか」
「冗談じゃありません。ゆうべ百足屋へ忍込んで、主人の市之助を殺して逃げましたよ」
「とうとうやったか——今までの変な仕事は、皆んなその大仕事へ運ぶ捨石だったに違げえねえ」
「出かけますか、親分」
「行かなきゃなるまい、お玉ガ池は鼻の先だ。それに、お前は百足屋に国分煙草一と摘みの恩があるじゃないか」
そんな事を言いながらも、平次は手早く支度をしました。捕縄を袂に落して、十手を懐中に、単衣の裾を七三に端折って、新しい麻裏を突っかけます。
「あい」
後ろから恋女房のお静が、カチ、カチ、カチと鎌を鳴らして切火を掛けてくれるのでした。

二

お玉ガ池の百足屋市之助は、正面から脇差で心の臓を一と突き——真に虫のように殺されておりました。
場所は煙草臭い店から、暗い廊下を入った奥の一と間。女房のお貞と主人の市之助が、居間にも寝部屋にも使っている、薄暗い六畳で、その入口の敷居の上に、仰向に引くり返っている死体を、まだ検屍前でその儘にしてあったのです。
「これは、銭形の親分さん」

挨拶をしたのは、女房のお貞の父親で、小泉町に大きな酒屋の店を持っている、万屋源兵衛でした。六十近い頑丈な老人で、さすがにこの騒ぎに駆付けても、取乱した様子もありません。

「御苦労様で」

その後ろから憶病らしく挨拶したのは、殺された主人の弟の三五郎です。兄の市之助が、小柄ではあるがちょいと好い男で、遊び好きで、諸芸に達して、道楽が止まないに比べて、弟の三五郎は恰幅だけは立派ですが、色の黒い、愛嬌のない、何方かと言うと、働くほかに興味も能もない不景気な三十男でした。

その横の方に、しょんぼりと坐っているのは、内儀のお貞で、二十七八の青白い顔と、品の良い物越しを特色にした、日蔭の紫陽花のような年増です。あまりの驚きと悲嘆に、泣くことも忘れたのでしょう、放心したような、そのくせ今にもどっと泣き崩れそうな表情と、堅く握り合せた華奢な両手が、ワナワナと顫えているのが、妙に平次の眼につきました。

殺された主人の市之助は、三十二というにしては、少し老けて見える男でした。女と酒に浮身をやつして、人知れぬ苦労を重ねたためか、それとも身だしなみが良過ぎて、却って若さを失って居るのかもわかりません。

良い男のくせに、顔は恐怖と苦痛に歪んで、妙に物凄まじく、胸の脇差は抜いてありますが、黒っぽい単衣をひたして、畳も障子も恐ろしい血飛沫です。

「鞘は？」

「此処にございます」

平次の声に応じて、三五郎は蝋塗りの鞘を引寄せました。

「その刃物に見覚えはあるのか」
「兄の物でございます、いつも隣室の納戸の箪笥の中に入れて置くのですが」
「――」
平次はうなずきました。曲者はまず隣の部屋に入って脇差を取出し、それからここへ来て主人を刺したことになるでしょう。
「親分、死骸の手首にひどい傷がありますね」
「気が付いたか――曲者と揉み合った時、手首に噛み付かれたんだろう」
「少し変じゃありませんか」
八五郎は尤もらしく首を傾げております。
「さいしょ主人が刃物を持って居たのさ――、曲者がその手に噛み付いたので、刃物を取落した――曲者はそれを拾って主人を刺した、ということになるかな」
「すると脇差を取出したのは、曲者でなくて主人ということになりますね」
「曲者が不案内な納戸へ入って、まず脇差を取出し、それから主人夫婦の寝部屋へ入ったと思うより、主人の市之助が、この節物騒だから、脇差を用意して寝ていたという方が本当らしくはないか、八」
「そう言えば、そんなものかも知れませんね」
八五郎は一応この説明で堪能しましたが、説明した平次自身が、却って覚束なさを感じている様子です。
「ところで、昨夜この騒ぎのあった刻限は？」
平次は内儀のお貞を顧みました。

「子刻過ぎ――丑刻（二時）近かったと思います」
「その時のことを詳しく聴きたいが――」
「私には何んにもわかりませんが、夜中にフト眼を覚ますと、私の枕元に人が立っておりました。そしてもう少しで喉を突かれるところでしたが、びっくりして声を立てると、狙いが外れて、枕を刺したので、私は危ういところで助かりました。――その弾みに行燈が倒れて消えてしまいましたが、私の声を聞いて、三五郎さんが飛んで来て、大変な騒ぎになったのでございますが」
お貞の話はしどろもどろです。
「そのあいだ主人はどうして居たんだ」
「どうして居たか、よくわかりません。店の方から燈を持って多勢駆け付けたので、始めて主人が殺されたことがわかりましたが」
「曲者は」
「その騒ぎの間に逃げてしまったことでございましょう」
お貞の話の埒のあかないのに気を揉んで、弟の三五郎は横合から口を出しました。
「曲者が内儀さんの喉を狙う前に、主人を刺したのか。それとも、その後で、灯が消えてから組討になって刺されたのか」
「それはよくわかりませんが――」
お貞の眼は何やら訴えるようでした。

三

「曲者の風体は？」
平次は問いを改めました。

「黒っぽい着物を着た、背の高い男で――」
「物は言わなかったのだな」
「え」
内儀は覚束ない記憶を絞(しぼ)り出すように、美しい眼をまたたきます。
「主人を狙わずに、内儀さんを狙ったわけだな」
「ところでもう一つ訊きたいが、主人は夜中に殺されたというのに、寝巻姿ではなくて、ちゃんと単衣(ひとえ)を着て、角帯を締めて居るのはどういうわけだ」
「昨夜は、――あの遅く戻りましたので」
「何処へ行ったのだ」
「――」
お貞は答え兼ねております。
「それにしても、お内儀さんは寝ているところを、喉笛を狙われたと言ったね」
そこに大きな矛盾(むじゅん)がありますが、市之助の道楽は隠れもないことで、遅く帰った事も仔細(しさい)のあることでしょう。
「親分」
不意に八五郎は、変なものを振り回わしながら飛んで来ました。
「何んだ、八」
「変なものがありますよ、――お勝手口に立てかけてあったんですが、古箒(ふるほうき)に衣紋竹(えもんたけ)を結えて、単衣を着せたのは、何んの禁呪(まじない)でしょう」
八五郎が持って来たのは、案山子(かかし)に似た変梃(へんてこ)なもので、平次にも何にに使ったものか見当が付きません。

「俺達が長尻なんで、下女が立てた禁呪じゃないか」
「それにしちゃ、箒に着物を着せたのは変じゃありませんか」
「この箒や単衣に見覚えは？」
平次はそれをお貞の方に見せました。
「一向見覚えのない品ですが」
その問いを引取って答えたのは弟の三五郎でした。
「お勝手はひどい泥だったそうですよ。下女のお兼がつまらない気をきかして、すっかり拭いたそうですが――」
「それは飛んだことをしたものだな」
平次は立上って、そこから二た間三間手前のお勝手を覗きました。主人夫婦の部屋からそこへ来る間に、下女のお兼の部屋がありますが、あとは納戸や便所で、曲者がお勝手から六法を踏んで通ったところで、誰にも気が付かれなかったでしょう。
下女のお兼というのは、十七になったばかり、健康でお人好しで、この上もない働きものですが、その代りこんなのは、床に入ったら最後、耳の側で鉄砲を撃たれても眼を覚まさない方でしょう。
「お前はこの家に何年奉公している」
「去年の春からですよ」
お兼は少し顫えて居ります。岡っ引などという人種はいつ人を縛るかわからないと言った、無知な恐怖にさいなまれて居るのでした。
「主人はどんな人だ」
「へ、親切な方でごぜえますよ」
「お内儀さんは？」
「良い方ですが、お気の毒でね」

「何が気の毒なんだ」
「お身体が弱いし、あの通り内気な方だから、無理もないが――」
お兼はそれ以上のことを言いません。
平次はいい加減に諦らめて、水下駄を突っかけて外へ出て見ました。
お勝手の敷居がひどく腐っている上、鑿か何にかでコジ開けられたらしく、戸は外れたままで、桟などはひどく痛んで居ります。
「この締りは誰がするんだ」
「私がしますだ、――昨夜も確かに桟を下ろして、輪鍵を掛けた筈なのに、けさ見ると輪鍵は掛って居ない上に、外から無理に開けられて、桟は折れていましただよ」
「お前が輪鍵を掛けるのを忘れたんだろう」
八五郎が顔を出します。
「そんな筈はねえだが」
下女の話を大概にして、外へ出て見ると、昨日の雨で生乾きの大地には、斑々として足跡が入り乱れ、どれが曲者のやらわかりませんが、そのことごとくが女物の水下駄で、現に鼻緒のゆるんだのが二足、お勝手の土間に揃っております。
「八、主人の身持がよくなかったようだ、店中の評判を聴いてくれ。それからお内儀のお貞の評判、これは近所で聴く方が宜いだろう」
「親分は？」
「俺は帰るよ、外から入った曲者を、ここで調べようはあるまい」
「店の者に逢って見ちゃどうです」
「無駄だろうと思うが、――偶には八の意見も聴いて見るか」

平次はそう言いながら店へ出て行きました。帳場を預かる番頭の吉兵衛は、五十二三の禿げ頭で、これは通いで、夜はこの家に居ず、店に寝るのは午吉（うまきち）という三十前後の煙草切の職人と小僧の与助だけ、これは十四というにしては少し智恵の遅れた、ノッポの少年です。

この三人は奥の事は何んにも知らず、同じ屋根の下に寝ていながらも、お内儀などとは滅多に顔を合せることもない様子です。

主人の弟の三五郎だけは、奥にも店にも立入り、煙草切も手伝い帳場も見ておりますが、これは無類の堅造で、夜分はお勝手の例の三畳に陣取り、曽（かつ）て夜遊びに出たこともないという心掛けの男です。

「それから、八」

「ヘエ」

「もう一つ頼みがあるよ、――この間から泥棒の入った家を一軒一軒当って見てくれ」

「？」

「泥棒の入った日と刻限（こくげん）を念入りに聴くんだ――それから入った手口だ」

「そんな事ならわけはありませんよ」

「時刻は半刻と間違っちゃいけないよ、――忘れないように紙へ書いて来るが宜い」

「ヘエ、――書くのは苦手だが、やって見ましょう」

平次の考えは八五郎に解（わか）りませんが、ともかくも大呑込で飛んで行きました。

四

「親分、大変なことになりましたよ」
ガラッ八が飛込んで来たのは、その翌る日でした。
「また泥棒が何処かへ入ったとでも言うのか」
平次はひどく落着いております。
「お神楽の清吉の野郎が、百足屋殺しの下手人を挙げて行きましたよ」
「誰だいその下手人というのは？」
「今から七年前――あのお内儀のお貞がまだ万屋の娘だったころ、執念深くつけ廻した、遊び人の歌松ですよ」
「歌松が何うしたというんだ」
「恋の怨で百足屋市之助夫婦を殺しに入ったという見込みで」
「七年前の恋の怨みか、――たいそう辛抱強く待ったんだね」
「歌松が本当に下手人でしょうか、親分」
「歌松は背の高い男だな」
平次は妙なことを訊きます。
「物干竿の歌松と言われたノッポですよ、五尺八寸はあるでしょう」
「歌松の足袋は何文だ」
「妙なことを訊くんですね、――背が五尺八寸ありゃ、足袋は十二文くらい穿きますよ」
「百足屋殺しの曲者は、歯の狭い女下駄を穿いて居るよ、歌松じゃあるまい」
「ヘエ？」

「それから曲者は五尺そこそこの小作りの男だ、――お神楽の清吉にそう言って教えてやれ」
「へエ」
「ところで、お前に頼んだことはどうだ」
「百足屋の主人の身持でしょう、――あれは大変な男ですよ」
「道楽者だとは聞いたが――」
「ちょいと男がよくて、喉自慢と来ているでしょう、身上などは持てる筈はありません。あのお内儀の里が小泉町の万屋で、神田きっての酒屋だから、持参だけでも何千両ということでしたが、何千両持込んだって、あの道楽じゃ三年と持ちませんよ。この二三年は水の手が切れ通しで、万屋をせびってばかり居たそうですが」
「悪い奴だな」
「その上お内儀のお貞が内気なのを良いことにして、近頃は町内に櫓下から這い出した、化猫見たいなお染という妾を囲って、月の半分は其方へ泊るということですよ」
「昨夜は？」
「宵のうちは妾のお染のところへ行っていたそうですが、不用心だからと言って、夜中に自分の家へ帰った――とこれは弟の三五郎とお内儀のお貞さんの口が揃っています」
「お内儀の方はどうだ」
「無類の評判ですよ、店の評判は言うまでもなく、御近所の金棒曳も、あの内儀には非の打ちようはありません。少し身体が弱いのは難だが――」
「弟の三五郎は？」

「兄の市之助と血を分けた兄弟とは思えませんよ、堅くて正直で、兄嫁思いで――」
「評判の悪いのは殺された主人の市之助だというわけか」
「あんな評判の悪い男はありません。死んだとなると、褒める者なんか、一人もありゃしません」
ガラッ八は酢っぱい顔をするのです。
「ところで、お玉ガ池を荒し廻った、泥棒の調べはできたか」
「書いて来ましたがね、あっしに字を書かせるなんざ、親分も殺生が過ぎますよ」
「心配するなよ、眼をつぶって読むから」
「冗談じゃねえ」
平次は八五郎が名筆を揮った盗難一覧表を読もうともせず、そのまま畳んで袖に入れました。
「いっしょに来るか、八」
「何処へ行くんで」
「万屋から、お妾のお染のところへ廻ろう」
「あの女は苦手ですよ親分」
「若い女は皆んな八の苦手さ」

五

万屋源兵衛は神田の大町人の一人で、主人の源兵衛は一代に巨万の富を積んだ人間に共通の、この上もなく強気な老人でした。
「お気の毒なことで――」
銭形平次の言う世間並の言葉を受けて、

「天罰ですよ、あの男の心掛けじゃ、畳の上で死ぬわけはない」
万屋源兵衛は、一克者らしい無遠慮さで、自分の婿をコキおろします。
「そんなに百足屋の評判は悪かったのかな、万屋さん」
「世間知らずの娘が命がけで頼むから、七年前に、大枚の持参で嫁にやったが、持参金を費い尽すと、今度は毎月の無心だ。あんまり図々しいから、この半歳ばかりは百も合力しなかったが、ありゃ日本一の極道者だね——親分の前だが」
源兵衛の口には遠慮もありません。
「この先も貢がないつもりだったのかな」
「はっきりそう言い渡してやりましたよ。妾に注ぎ込む金を貢ぐようなものだから、私が甘くすれば、娘を泣かせるばかりで」
「なるほどね」
「死んだ者の悪口を言っちゃ済まないが、好きで嫁に行った娘は、自分の不心得から出たことと、今じゃ諦めていましたよ。あんな奴は生き長らえるほど世間迷惑さね、——そうじゃありませんか、銭形の親分」
万屋源兵衛の話に辟易して、平次も尻尾を巻くほかはありません。
お玉ガ池——も幕末の頃は、大きな盥ほどの水溜りになっていたそうですが、平次の活躍していた頃はまだ池の形のあった頃で、その池のほとりに、誂えたような見越しの松、船板塀の中に納まったお染を、平次と八五郎は無意気な調子で驚かしました。
「お前は百足屋の世話になっているお染と言うのだな」
「まア」

入口の障子に半身を隠して、その二人の岡っ引を、存分に非難した調子で迎えたのは、二十三四の、豊満この上もない女でした。髪の毛の鬱陶しいほど多い、ブルース唄いのように少し声の皺枯れた、そのくせ血色が鮮かで、満身ことごとく媚と肉感とでちあげたようなお染は、百足屋の内儀お貞の、淋しくつつましく、病的にさえ見える弱々しさと、まさに絶好の対照を成すものでした。

「あの晩、市之助が帰って行ったのは何刻だ」

平次の問いはいきなり核心に飛込みます。

「夜半過ぎだったかも知れません。急に家の事が心配になったからと言って——」

「今までも時々そんな事があったのか」

「え、十日に一度、七日に一度、夜中に帰ることがありました」

「夜中に帰った晩を覚えているなら、先月から順序に言ってくれ」

「そんな事を覚えちゃ居ませんよ」

お染はまた障子に縋り付いたまま、クネクネと全身で表情をするのです。赤い唇、太い声、——物を言ったり身じろぎしたりする毎に、妖気の発散する女でした。

「そいつは大事なことだ、何んか思い出す工夫はないか」

平次は容易に諦めません。

「お秋が覚えて居るかも知れません。あの人は物覚えの良い女ですから」

お染は引込みましたが、間もなく三十前後の恐ろしく醜い女が、前掛で手を拭き拭きでてきました。

「旦那様が夜中にお帰りになったのは、先月の十日と二十三日と

二十八日と、今月になってから三日と七日、それから一昨日の晩だけでございますよ」

この醜い女の頭の良さに、矢面に立った八五郎はすっかり圧倒されましたが、その間に平次は忙しく懐中から、八五郎の調べ書きを出して、お秋の言葉を引合せながら、すっかり夢中になっております。

「有難う、それで大助かりだよ、――ところでお染」

「？」

平次は問いをつづけました。

「百足屋の旦那は、月々どれくらいずつ貢いでいたんだ」

「そんな事も言わなきゃなりませんか」

お染はすっかり脹れております。

「まア、お白州で言うより、ここで言った方が無事だろうよ」

「月々五両のきめでしたが、――でも十両にも二十両にもなったことがあります」

「たいそう張ったものだな、――ところで市之助は、近い内にお前を百足屋の家へ引取ると言った筈だが――」

「そんな嬉しがらせを言って居ましたけれど――綺麗なお内儀さんが居るんですからね」

お染は、それはあまり当てにしていない様子でした。

六

「大変な女ですね、親分」

お染の家から出ると、ガラッ八はペッペッと唾を吐きながらた

まり兼ねたように斯(こ)う言うのでした。
「遊び馴れた百足屋市之助が好きそうな女じゃないか」
「ところで、下手人は誰でしょう、親分」
「まだわからないのか、八」
「へエ」
八五郎はキナ臭い顔をするのです。
「百足屋へ行って見よう、下手人はもうわかって居る筈じゃないか」
「それがわからないから不思議で」
二人は百足屋へ入って行くと、平次は店に居た弟の三五郎に耳打して、女房のお貞を、人目を避(さ)けて離屋に呼びました。座にいるのはお貞の外に三五郎と平次と、そして狐につままれたような八五郎だけ。
「さて、――主人の市之助を殺した下手人は、この平次には判ったつもりだ。よく腑(ふ)に落ちるように筋道を立てて話して見ようと思うが――」
「親分さん――」
三五郎は泳ぐような手付きをして、膝を立て直しました。が、平次は静かにそれを止めて続けるのでした。
「百足屋市之助、――お前には兄、お内儀さんには良夫(おっと)だが、近頃になって放埒(ほうらつ)がますます募った。小泉町の万屋(よろずや)からはこの上一文も出ないとわかると、お内儀さんを追い出してお染を引入れようと思ったが、小泉町には何千両という借金があるから、手軽にそんな事はできない。そこで市之助はお内儀さんを殺して、お染を引入れ、小泉町にも文句を言わせない工夫を思い付いた」

「まア、親分さん」
お貞はその恐しい曝露に堪えなかったものか、驚いて平次の口を塞ごうとしましたが、平次の冷たい力強い調子は、それを振り切ってつづけます。
「いきなりお内儀を殺しては、すぐ知れる。そこで、町内の物持を五六軒も荒し廻り、泥棒の仕業と見せようとした。薬鑵や玩具を盗んで、すぐ捨ててしまったのはその為だ」
「これは主人がお染のところから夜中に帰った晩に限って起ったことで、お染のところの下女の言葉と八五郎の調べとピタリと合っている」
「――」
「泥棒は背の高い肩幅の広いヒョロヒョロした男だと言われて居るが、主人は人並外れて背の低い男だ。それは衣紋竹に箒を結え、単衣を着せて背負って歩き、背の高い男と見せるようにした為だ。主人が殺された翌る朝、その仕掛物が此家のお勝手口にあったが、単衣の柄を三五郎は見覚がないと言ったのは、多分嘘だろう。見覚はあった筈だ――その時お内儀と眼配をしたのを、私が見落す筈はない」
「――」
「この辺で宜いというとこで、主人は一昨日の晩自分の家に忍び込んだ。何処からでも入れるのに、わざとお勝手口の戸をコジ開け桟をこわして入った、尤も輪鍵は宵のうちに内から外して置いたのだろう。庭の足跡が女物の水下駄の跡ばかりで、外から入った曲者の足跡のなかったのは手落だが、それくらいの縮尻は気の廻る悪人でもよくあることだ」

「――」

「さて、主人は納戸から脇差を取出して、自分の女房を刺そうとしたが、お内儀が眼を覚して声を立てたので、あわてて行燈を引くり返した。――そこへ三五郎が飛込んで来て、曲者がまさか自分の兄と知らないから、真っ暗な中で組討が始まった。――曲者の手に噛り付いて刃物をもぎ取り、それを構えたまま真っすぐに闇を突く――とこれが天罰と言うものだろう、脇差は兄の市之助の胸に突っ立って、あっと言う間に死んでしまった。――そこへ店から多勢の人たちが灯を持って来た、――いまさら驚いたがどうしようもない、お内儀と三五郎と口を合せて、曲者が外から入って来たということにして誤魔化すつもりだった」

平次の論告は終りました。その言葉の中ば頃から、深々とうな垂れた二人は、この時平次の前にヘタヘタと崩折れて、

「その通り、少しの違いもございません。まさか実の兄とは知らず、殺す気もなく突き出した闇の中の刃物で、私は大それた事をしてしまいました。この上はいさぎよくお縄を頂戴いたします」

三五郎はそう言って、観念の両手を後ろに廻すのです。

「あれ、三五郎さん、悪いのはお前さんじゃない、――どうぞ私を」

お貞もいっしょに縛られて行くつもりでしょう、後ろに手を廻して、困じ果てた八五郎の膝に摺り寄るのです。

「兄殺しは重罪だが、自分の家へ入っても泥棒は泥棒に違いない、それを暗闇の中で成敗したのは神業だ。ここでお前を縛っちゃ、少しばかり十手冥利が悪かろう。なア、八、どうしたものだ」

平次は静かに八五郎を顧みるのでした。

「帰りましょうよ、八丁堀の旦那衆のお叱(しかり)は覚悟の前で、――百足屋(むかでや)の主人を斬った泥棒はつかまらなかったという事にして」

「それも宜かろう」

我が意を得たりと言った顔で、平次は立ち上がりました。三五郎とお貞――この純情な二人の男女の行末(ゆくすえ)はどうなるか、そこまでは考えて居られません。

（編注）

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩　柚月

初出―「オール讀物」昭和二十二年七月号　文藝春秋新社

底本―「銭形平次捕物全集」第八巻　河出書房　昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行　銭形倶楽部